首都大学東京ＳＴＡ・ＴＡ研修 開催報告

ＴＡの質向上を図る新たな試み

首都大学東京では、授業補助体制強化による学部教育の充実と、大学院生の教育力養成及び経済的支援強化の観点から、平成 27 年度に従来の TA（ティーチング・アシスタント）制度の改正及び拡充を図りました。また、TA の質の向上に資するための施策として、FD 委員会主催による全学的な研修を実施しました。今回はそれらの取組についてご紹介します。

1　新たな TA 制度の概要

TA 制度の改正に当たっては、教育補助業務の内容を精査し、各業務のレベルを区分（「表 1：業務区分表」参照）するとともに、レベルに応じた３つの職区分〔シニア・ティーチング・アシスタント（STA）/ ティーチング・アシスタント（TA）/ スチューデント・アシスタント（SA）〕を設定し、主体性を育成する授業や授業時間外学習を支援できるような制度設計を行うことにしました。

〔表 1：業務区分表〕

↑高度 ←授業内			授業外→
区分A		★その他STAの業務として適当なもの	★授業時間外の補講実施 ★実習・フィールドワーク演習の企画・立案 ★教材・課題・レジュメの作成
区分A	☆実験・実習・演習の説明・指導 ☆グループワークのファシリテーション	☆発表方法の指導 ☆学生からの質問への対応	☆レポートの添削 ☆レポート・小テストの採点補助
区分B	☆実験・実習・演習の部分的な実施 ☆学外実習での現地指導補助 ☆発表等の司会	☆学生からの質問への対応 ☆その他TAの業務として適当なもの	
区分B	☆実験・実習・演習の指導補助 ☆装置・PCの使い方説明 ☆グループワークの指導補助 ☆試験監督補助		
区分C	☆教室・実験室の準備・片付け ☆実験・実習・演習の補助 ☆グループワークの補助 ☆簡単な授業内の質問対応		
区分C 単純↓	☆教材印刷・運搬・配布 ☆出欠確認 ☆PC・プロジェクター操作 ☆レポートの回収・提出確認 ☆答案・アンケート配布・回収 ☆その他授業内での単純補助業務	ＳＴＡ：区分Ａの業務が主たる業務（概ね５０%以上） Ｔ　Ａ：区分Ｂの業務が主たる業務（概ね５０%以上） Ｓ　Ａ：区分Ｃの業務	

★はSTAのみ担当可能な業務

職区分ごとに従事内容を明確化することにより、特に優秀な博士後期課程の学生が STA として、主に指導力・企画力を要する高度な TA 業務に従事することが可能となりました。

2　研修の概要

今回の研修は、グループワークを通じて情報共有を図ることにより、教育指導力の向上と、モチベーションを高めてもらうことを目的としました。

〔開催日時・場所・参加者数〕

平成 27 年 10 月 27 日　荒川キャンパス　　2 名
平成 27 年 11 月 6 日　日野キャンパス　　28 名
平成 27 年 11 月 16 日　南大沢キャンパス　29 名

〔研修内容〕

◇オリエンテーション
◇個人ワーク及びグループワーク①
「TA はなぜ必要なのか」
◇グループワーク②
「トラブル事例の解決策を考える」
◇グループワークの発表
◇解説・振り返り　　（計 90 分）

〔研修の様子〕

始めに、TA の必要性や役割について、各自ポストイットに記入してもらいました。次に、それらを３～５名のグループで持ち寄り、マッピングを行いました。

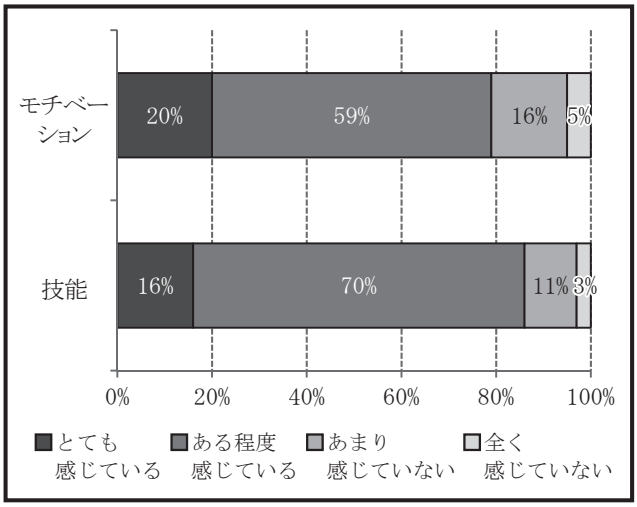
また、「グループディスカッションに参加できていない学生がいる」「実習・実験に遅れている学生がいる」「回答を知りたがる学生がいる」等、TA として直面すると思われる問題を複数示し、グループごとに１つを選択した上で、TA の役割から導かれる解決方法につい

て検討してもらいました。専攻や TA 経験年数が異なる学生同士で熱心な議論や情報交換が行われ、グループで話し合った結果は 5 分程度で発表してもらい、参加者全員で解決策の共有化を図りました。

3　研修の振り返り

研修参加者 59 名のうち、56 名から研修に関するアンケートの回答を得ました。

〔技能及びモチベーションを高めることができたと感じているか〕



〔研修の良かった点（抜粋）〕

◇ STA・TA としての役割がわかったこと（14 件）
◇他の STA・TA と意見交換をできたこと（14 件）
◇グループワーク、ディスカッションができたこと（6 件）
◇講師の説明（4 件）
◇タイムマネジメント（3 件）
◇モチベーションが上がったこと（3 件）
◇責任を負っていることを再認識できたこと
◇多角的に物事を見ることができたこと

〔研修の改善して欲しい点（抜粋）〕

◇時間が短い（10 件）
◇実施時期（2 件）
◇資料を事前に配布してほしい（2 件）

また、今回の研修を欠席した STA に対しては、「STA として求められる能力や姿勢とは」「STA の経験が今後のキャリアプランにおいてどのように役立つのか」という 2 点の課題を提示し、ｅラーニングシステムへのレポート提出を求めました。提出されたレポート 13 件に対しては、後日、研修担当教員がコメントを付して返却しました。

FD 委員会では、今回のアンケート結果を踏まえて開催時間延長及び実施時期追加を含む改善を図り、次年度以降の全学研修を開催する予定です。

研修講師を担当して

首都大学東京
大学教育センター教授
ＦＤ委員会委員
松田 岳士

ワークショップ形式で行なわれた研修では、嬉しい驚きがいくつかあった。第一に、全ての会場で個々の参加者が積極的に課題に取り組んでくれたことである。その結果、TA/STA の意義や役割として、単に「授業を円滑に実施する」といった結論だけでなく、「自らの成長につながる」、「教員とは違った立場で学生・院生を支援できる」ことを指摘する者も多かった。これは、参加者が自らの職責を真摯に捉えていることの表れであるばかりでなく、メタ認知を持って業務の改善を図れる可能性をも示している。

第二に、グループワークにおいて参加者同士の教え合いが活発に展開されたことである。実際、今回の研修では、グループワークや結果発表の時間が不足気味になるほどであり、事後アンケートにおいても他の TA/STA との交流は高く評価されていた。

来年度からは、今回の研修参加者の力も借りて、より実効性のあるワークショップを設計・実施していきたい。